様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６１８
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２３２７

研究課題名（和文）アイルランド自由国（1922-37）の文学における対抗的国民性：イェイツを中心に

研究課題名（英文）Counter-Irishness in the Literature of the Irish Free State (1922-37): Yeats, Joyce, O'Connor, and F. Stuart

研究代表者
諏訪　友亮（SUWA, Tomoaki）

実践女子大学・文学部・講師

研究者番号：３０６３３４０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：W・B・イェイツを中心に、アイルランド自由国期における作家たちの代替的な国民像の提示について研究を行えた。イェイツにおいて、新たな国民とは性的表現に対する検閲をしない、自由な創作活動を許す価値観を持つ人々とされた。一方で、そうした検閲を支持する大多数のカトリック系国民の自由を制限し、自らが属す少数派アングロ・アイリッシュに好意的な、ファシズムに類似する権威主義政府の統治を認めるものでもあった。

期間内に、関連する研究として査読付き論文5本、研究発表4本（単独3本、共同1本）の成果をあげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでアイルランド史において真剣には見てこられなかったアイルランドのファシズムを、近年の資料を参照しながら改めて研究の俎上に載せ、反政権と議会制民主主義批判で共通するイェイツとアイリッシュ・ファシズムの密接な関係を指摘した点は、アイルランド文学・文化研究上の成果だと言える。

戦間期のファシズムは民主主義が不安定化するなかで登場した。民主主義の不確定性が増す現代にも通じる20世紀前半の民主主義の危機に対して、アイルランドの作家が示した応答を議論することは、文学と民主主義の関係をめぐる問題の解明に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：A series of studies were undertaken on the alternative national images presented by writers during the Irish Free State period. In Yeats' view, the new nation was composed of people who held values that did not censor sexual expression and allowed for free creative activity. On the other hand, it was also seen as an entity that curtailed the freedom of the majority of Catholic citizens who supported such censorship, that recognized the rule of an authoritarian government akin to fascism, favoring the minority Anglo-Irish community to which Yeats himself belonged.

Several research outputs were produced within the period of study, including five peer-reviewed papers and four research presentations (three individual, one collaborative).

研究分野：英文学および英語圏文学関連

キーワード：W・B・イェイツ　アイルランド自由国　ナショナリズム　ファシズム　民主主義　モダニズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1922 年にイギリスより独立したアイルランド自由国では、国民の大多数を占めるカトリック系住民の規範がますます強まり、文学をはじめとする芸術を検閲などの形で抑圧し始めた。そうした流れに対抗すべく、イェイツを中心にしたアイルランド作家たちがどのような国民像の更新を図ったのか、その中でなぜ一部の作家が自由主義的傾向を保ちつつファシズムに類する権威主義を支持したのかが本研究の問いだった。

２．研究の目的

本研究の目的は、イェイツらアイルランド作家がどのような代替的国民像を提示し、なぜ自由主義的主張をしつつも権威主義政府の登場を願ったのかという問いへ答えることにあった。

３．研究の方法

イェイツたちの作品を、アイルランド史、ファシズム、民主主義などの関連研究を参照しながら読み解いた。ファシズム研究には、戦間期のイタリアとドイツに対して積み上げられた Roger Griffin らの理論に加え、アイルランドのローカルな組織である青シャツ隊の資料が含まれる。

４．研究成果

(1)　対抗的国民：自由な創作活動と検閲の批判

イェイツにおいて、新たな代替的国民とは、性的表現に対する検閲をしない、自由な創作活動を許す価値観を持つ人々とされた。イェイツは、作家および芸術家の活動を制限しない寛容な国民性を求めており、この点で 1920 年代に制定された一連の検閲法に対する批判は苛烈を極め、晩年の 1930 年代後半まで批判を続けていくことになる。

(2)　自由と不自由：秩序をもたらすとされた権威主義政府、アイリッシュ・ファシズム

イェイツは、検閲を支持する大多数のカトリック系国民の自由を制限し、自らが属すマイノリティーであり主としてプロテスタントのイギリス系アイルランド人（アングロ・アイリッシュ）に好意的な権威主義政府による統治を待望した。その政府は、イギリスとの条約に反対し経済戦争を起こす de Valera たちの政権がもたらした社会不安を収めることも期待された。イェイツは、そうした政府の登場を願い、反政権と議会制民主主義の否定という利害で一致した青シャツ隊（アイルランドのファシズム勢力）の運動を一時的に支持するに至っている。ここには、自由と不自由のパラドックスがあり、カトリック系住民の自由を推し進めれば作家たちの不自由を引き起こし、創作活動の自由のために権威主義政府を求めれば、住民たちの自由を制限するという問題がある。なお、イェイツはその権威主義政府が、イタリアとドイツでそうであったように、文学を含む芸術を検閲する可能性を考えていなかった。

(3)　議会制民主主義批判、青シャツ隊のコーポラティズム（職能代表制、協調組合主義）

イェイツは 1920 年代初めからファシズムに注目し、やがて支持に回ったが、両者は議会制民主主義を否定した点で共通していた。彼は、多数派による抑圧をなくすためには、選挙によらない、一部のエリートによる統治に可能性を見出し、自由な芸術活動の実現を望んだ。従来、アイ

ルランドの青シャツ隊と大陸のファシズムには、敬礼や制服などの見た目以上の類似は指摘されてこなかったが、青シャツ隊では議会制民主主義を否定し、代わりにコーポラティズムを支持するなど、ファシズムからの明らかな影響が見られる。

(4) マイノリティーとしてのイギリス系アイルランド人（アングロ・アイリッシュ）

イェイツが、ファシズムと権威主義政府を支持した背景には、芸術の自由な表現という問題以外にも、マイノリティーであるアングロ・アイリッシュとしての立場が見て取れる。マイノリティーゆえに議会に代表者を送り込めない政治的無力が、マイノリティーに好意的な権威主義政府を望むに至ったわけである。実際、アングロ・アイリッシュから青シャツ隊に参加していた者もおり、なかには戦後もヒトラーを信奉する者もいた。

(5) 寛容なセクシュアリティー観

イェイツは同性愛者を差別的に見ていた形跡が見られない。オスカー・ワイルドがイギリスで同性愛裁判にかけられた際には、セクシュアリティーの特異さを扇動しスキャンダラスに扱うのではなく、イギリスにおけるアイルランド人の孤立を問題にしている。

(6) モダニズム文学の保守派

モダニズム文学者におけるファシズムへの接近は、イェイツにとどまらず、アメリカ詩人エズラ・パウンドや T・S・エリオットにもあった傾向である。彼らには、ヨーロッパの過去への憧憬、古典主義などが同様に見られるが、イェイツにおいては 2 人とは異なり、ユダヤ人差別が全くないと言える一方、強固なまでの優生思想を持っていた。

(7) The International Yeats Society との合同国際大会

2018 年に開催された日本イェイツ協会と The International Yeats Society の合同国際大会に日本イェイツ協会の事務局長として携わった。参加者確認、プログラム作成、京都大学百周年時計台記念館の会場予約、レセプションの手配、関連講演への謝金手続きなど、業務は全般に及んだ。

(8) Ezra Pound International Conference (EPIC) 2022 の日本開催

2022 年にオンラインで行われた Ezra Pound International Conference 2022 において、管理者として Zoom の一室を運営した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 諏訪 友亮	４．巻 74
２．論文標題 De Profundisのテクスト史にみる同性愛性とワイルド受容	５．発行年 2022年
３．雑誌名 實踐英文學 = Journal of Jissen English Department	６．最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002336	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 諏訪 友亮	４．巻 63
２．論文標題 アメリカの“filthy modern tide” ――南部の新批評にとってのモダニティーとW・B・イェイツ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 実践女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002200	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 諏訪 友亮	４．巻 65
２．論文標題 W・B・イェイツと青シャツ隊 ――アイリッシュ・ファシズムをめぐる1930 年代	５．発行年 2023年
３．雑誌名 実践女子大学文学部紀要 = The Faculty of Letters of Jissen Women's University annual reports of studies	６．最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002432	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 諏訪 友亮	４．巻 25
２．論文標題 エズラ・パウンドのボリンゲン賞問題 ： 形式と内容の対立を超えて	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Ezra Pound Review	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 諏訪　友亮
2．発表標題 『獄中記』とワイルドの同性愛受容の変遷 ーーイギリスとアイルランドの間でー
3．学会等名 実践女子大学公開講座
4．発表年 2021年

1．発表者名 諏訪友亮
2．発表標題 東欧詩という傍流ーーチェスワフ・ミウォシュ
3．学会等名 日本アメリカ文学会東京支部
4．発表年 2021年

1．発表者名 諏訪　友亮
2．発表標題 エズラ・パウンドのボーリンゲン賞問題-ーーファシズム論争の起源
3．学会等名 日本エズラ・パウンド協会
4．発表年 2018年

1．発表者名 諏訪　友亮
2．発表標題 De ProfundisとRobert Rossーーワイルド死後の優越をめぐって
3．学会等名 日本ワイルド協会
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名 岩永　弘人、諏訪　友亮、谷本　佳子	4．発行年 2021年
2．出版社 音羽書房鶴見書店	5．総ページ数 431
3．書名 緑の信管と緑の庭園	

〔産業財産権〕

〔その他〕

オスカー・ワイルドと本間久雄博士ーメーソン・ライブラリーのデジタル化を記念して
https://www.jissen.ac.jp/society/study/citizen/holding/2021seminar-r.html

Kyoto Symposium 2018
http://the-yeats-society-of-japan.jp/kyoto-symposium-2018/

EPIC-Kyoto 2022
https://www.epic-kyoto.com/program

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 The International Yeats Society and the Yeats Society of Japan Joint Symposium in Kyoto 2018	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Ezra Pound International Conference (EPIC)	開催年 2022年～2022年

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	Universite Sorbonne Nouvelle, Paris 3			
ベルギー	KU Leuven			
英国	University of Liverpool	University of York	Southampton Solent University	

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Brown University			
スペイン	Universitat Autònoma de Barcelona			
ポーランド	University of Lodz			
ギリシャ	American College of Greece			
アイルランド	National University of Ireland, Galway	University of Limerick		
韓国	Korea University	Dongguk University		
インド	University of Burdwan			
ノルウェー	University of Agder			
シンガポール	Nanyang Technological University			